

## 第3章 周辺地域の環境

### 1 札幌の縄文遺跡

札幌市は、北海道の中央部と西南部とを地形的に隔てる低地帯（石狩低地）の日本海側に位置し、南北 45.4km、東西 42.3km、面積 1,121.26km<sup>2</sup>の広さを有しています。札幌市内の地形は多様で、中心市街地は豊平川や発寒川により形成された扇状地上に広がり、北西～南西部は山地で、東部には丘陵地や台地が続きます。一方、北部には沖積平野（石狩平野）が広がり、その北西側の発寒川沿いには、紅葉山砂丘とよばれる古砂丘が南西から北東方向に延びています。

このように多様な地形を有する札幌市内では、これまでの調査で 500 カ所以上の遺跡が発見されています。そのうち 265 カ所の遺跡で、縄文文化の早期から晩期にかけての遺構や遺物が発見されています。これらの縄文遺跡は、比較的標高の高い東部の台地や丘陵地に最も多く分布し、次いで、その北西側に広がる札幌扇状地や発寒川扇状地に多くみられます。一方、北部に広がる沖積平野では、やや標高の高い紅葉山砂丘を除き、縄文文化の遺跡は数カ所しか発見されていません。

時期的な移り変わりをみると、縄文早期には東部の台地や丘陵地でのみ遺跡がみられ、次の縄文前期になると発寒川扇状地にも遺跡が残されるようになります。縄文前期は、縄文早期の頃はじまった地球規模の温暖化現象の最盛期にあたり、海面が上昇して内陸部まで海水が入り込んだことが知られています（縄文海進<sup>※6</sup>）。市内でも北部に内湾が成立し、内湾と外海を隔てる紅葉山砂丘も、この頃より形成されたものと考えられています。この時期には、日本各地で貝塚が形成されますが、今のところ札幌市内では見つかっていません。

次の縄文中期になると、全国的な傾向と同様に、札幌市内でも遺跡数が増加し、東部の台地・丘陵地や発寒川扇状地に加え、標高 5m 前後の紅葉山砂丘まで活動の領域が広がっていきます。さらに、縄文中期後半から後期になると、それまでほとんど遺跡が残されることのなかった札幌扇状地や沖積平野の低地部にも、少数ながら遺跡が残されるようになります。この傾向は縄文晩期にも引き継がれ、次の続縄文文化へと続いていきました。

※6) 約 8000～6000 年前頃に、日本近海で現在に比べて海面が 2～3m 高くなり、日本各地で海水が陸地奥深くに浸入した現象。



第1表 さとらんの遺跡年表

おもなできごと (日本列島)	本州の時代区分	年代	北海道の時代区分 <sup>※</sup>	おもなできごと (北海道)	
槍の使用がはじまる  土器の使用がはじまる 竪穴住居がはじまる 弓矢の使用がはじまる 土偶がはじまる  気候の温暖化 縄文海進  大規模な貝塚が形成される  東日本に亀ヶ岡文化が広がる	旧石器文化	20000年前	旧石器文化	北海道に人が住みはじめる 細石刃文化が広がる	
	縄文文化	草創期	16000～15000年前	草創期	北海道で土器の使用がはじまる
		早期	10000年前	早期	竪穴住居がはじまる 石刃燧文化が波及する 札幌北部の低地が内湾となる
		前期	7000年前	前期	大規模な貝塚が形成される
		中期	5500年前	中期	紅葉山砂丘に人が住みはじめる
		後期	4500年前	後期	ストーンサークルがはじまる 周堤墓がはじまる 亀ヶ岡文化の影響を受ける
		晩期	3000年前	晩期	
	弥生文化	2300年前	続縄文文化	H508遺跡(丘珠縄文遺跡) H317遺跡(下層)  H509遺跡	
	古墳文化	1300年前	オホーツク文化	オホーツク海沿岸に北方系のオホーツク文化が広がる	
	飛鳥時代			擦文文化	カマド付の竪穴住居がはじまる 鉄製品が一般化する 穀類が普及する H317遺跡(上層)
奈良時代	アイヌ文化期				土器にかわり鉄鍋が普及する 平地式住居がはじまる
平安時代					チャシが築造される
鎌倉時代					
室町時代					
安土・桃山時代					
江戸時代					
水稲耕作がはじまる  邪馬台国 前方後円墳がはじまる  仏教の伝来 大化の改新 平城京に都がうつされる  平安京に都がうつされる  鎌倉幕府がはじまる  室町幕府がはじまる  戦国時代  江戸幕府がはじまる					

※北海道の時代区分は、考古学における一般的な時代区分を示しています。



このような分布の移り変わりを示す市内の縄文文化の遺跡からは、当時の生活の拠点である竪穴住居、お墓や貯蔵穴、動物を狩るための落とし穴などが見つかっています。ただし、数十～数百軒の竪穴住居跡が残されるような、長期間にわたって繰り返し人々が生活したことを示す大規模なムラ（集落）の跡は、市内では見つかりません。これまでの調査では、お墓と考えられる土坑が数十～数百基残された遺跡はみつかりしていますが、それ以外は数軒～十数軒の竪穴住居跡や数カ所～数十カ所の落とし穴が見つかる程度の、規模が小さな遺跡です。古くからの開発で、すでに破壊されてしまった可能性もありますが、小規模な遺跡が多いことも、札幌市内の縄文遺跡の特徴と言えます。

## 2 遺跡の位置と周辺の環境

### (1) 地理的環境

丘珠縄文遺跡は、札幌市の北部に広がる沖積平野（石狩平野）に立地する縄文晩期の遺跡です。遺跡付近における現在の地表面の標高は5m前後、縄文晩期の旧地表面の標高は3m前後と、低い土地に残された遺跡です。

石狩平野は、縄文早期の後半から前期頃の「縄文海進」により内湾が形成されていたと考えられており、丘珠縄文遺跡の付近も、その頃は湾奥の環境だったと推定されます。その後、海水準がわずかに低下するとともに、河川からの土砂による埋積が進み、内湾域は徐々に平野となっていきます。蛇行する河川が氾濫を繰り返しながら土砂を堆積させることで、平野部に氾濫原<sup>はんらんげん</sup>が発達し、微高地（自然堤防）が形成されました。縄文晩期には、この平野部に人々が進出し、河川に沿った微高地を活動領域としました。こうして、丘珠縄文遺跡は形成されたものと考えられます。

遺跡の北東側に位置するモエレ沼は、「縄文海進」後の氾濫原を蛇行した河川の名残<sup>みかづきこ</sup>（三日月湖）です。最近の札幌市博物館活動センターによるボーリング調査の結果などから、この三日月湖は石狩川により形成されたと考えられています。すなわち、石狩川の本流ないし支流が、縄文晩期頃に、遺跡の近くを流れていた可能性があり、丘珠縄文遺跡がのる微高地の形成にも関わったものと推測されます。

### (2) 歴史的環境

北海道には、25000年前頃には北東アジアや東アジアから人々<sup>\*7</sup>が渡来し、旧石

器文化が広がります。その後、15000年前頃からはじまる気候の温暖化に伴い、北海道も本州と同じように、狩猟・漁撈・採集を生業とし竪穴住居で生活する縄文文化へと移り変わります。縄文文化のあと、本州では水稻耕作がはじまり弥生文化となりますが、北海道では稲作は広がらず、北海道の環境に適応した狩猟・漁撈・採集を中心とする続縄文文化に変わります。本州で奈良時代がはじまる頃、北海道では、土器のかたちや竪穴住居の作り方、鉄製品の製作や穀類の栽培等、本州の文化の影響を受けて、<sup>さつもんぶんか</sup>擦文文化がはじまります。本州で平安時代が終わり鎌倉時代になる頃、北海道では、土器が作られなくなり、擦文文化が終わります。これ以降の本州の中世から近世に相当する時期を、北海道ではアイヌ文化期<sup>※8</sup>と呼び、この時期を通して、アイヌ文化<sup>※9</sup>が形成されていったと考えられています。

江戸時代になると、文献記録の中にアイヌ文化期の札幌に関する記述が認められるようになります。アイヌ語に由来する「札幌」<sup>※10</sup>の名称は、17世紀後半に弘前藩の関係者により記録された『津軽一統志』<sup>つがるいっとうし</sup>の中に、「さつほろ」として認められ、『津軽一統志』や同じく弘前藩の記録である『寛文拾年狄蜂起集書』<sup>かんぶんじゅうねんえびすほうきしゅうしょ</sup>には、「さつほろ」(札幌)や「はつしやふ」(発寒)にコタンがあったことが記されています。

丘珠地区では、縄文文化のあと、丘珠縄文遺跡に近接するH317遺跡の調査等で、続縄文文化初頭の炉跡や土器・石器、また、擦文文化のムラ(集落)の跡が見つかっています。アイヌ文化期の丘珠地区の様子については、今のところよくわかっていませんが、文献記録では、『津軽一統志』の中に「さつほろの枝川に縦横半里計の沼御座候由」との記載があり、丘珠地区の北東に位置するモエレ沼を指すものと考えられています。北海道の他の地域と同じように、「丘珠」<sup>※11</sup>や「モエレ」<sup>※12</sup>をはじめとしたアイヌ語に由来する地名があることから、丘珠周辺でも、アイヌの人々<sup>※13</sup>が活動していたものと考えられます。

近世末になると、慶応2年(1866年)に、徳川幕府の命を受けた大友亀太郎が伏籠川のほとり(現在の東区北13条東16丁目付近)に入植し、「御手作場」<sup>おてさくば</sup>(模範農場)を開いて大友堀を開削するなど、丘珠地区のある東区では、明治時代以降の札幌の基礎が形づくられていきます。

大友亀太郎の入植にはじまる元村の北東に位置する丘珠地区は、明治3(1870)年の酒田県(現在の山形県の一部)からの入植にはじまり、明治4(1871)年に「丘珠村」という村号が定められ、明治35(1902)年には元村、苗穂村、雁来村とともに「札幌村」として統合されます。

明治時代以降、牧草地、畑地、水田として土地利用がはかられ、大正時代を経て、札幌を代表するタマネギの優良産地となりました。また、昭和17(1942)年に旧日本軍により丘珠飛行場(現在の丘珠空港)が開設され、昭和30(1955)年には札幌市に合併、昭和47(1972)年に札幌市が政令指定都市となり東区が設置されると、農村地帯であった丘珠地区にも市街化の波が押し寄せ、宅地化が進行していきます。

平成に入ると、サッポロさとらんどやモエレ沼公園、丘珠空港周辺の緑地など、大規模な施設・公園・緑地が整備され、札幌の都市型農業の拠点として、また、みどり豊かな施設が集積する交流拠点として位置付けられています。現在の丘珠地区は、札幌駅を中心とした5~10km圏内に位置し、札幌の市街地に隣接して、農地や緑地、川辺など、平地のみどりが広がる自然豊かな地域です。

※7) 近年のミトコンドリアDNA分析では、「北海道の縄文人が保持していたのは、より北方の沿海州の旧石器時代人につながると考えられるDNA」であり、日本列島への人類の渡来は「従来いわれてきた南方ルートだけではなく、多様なルートを想定する必要がある」とされています(篠田謙一・安達登 2010「DNAが語る「日本人への旅」の複眼的視点」『科学』vol.80 No.4 岩波書店)。

※8) 考古学では、北海道で擦文文化が終わったあと、本州の中世・近世に相当する時期を「アイヌ文化期」と呼んでいます。

※9) 現在アイヌ文化として捉えられている文化は、「近世に松前藩や本州の役人・旅行家が残した記録や近代から現代にかけて行われた民族学的調査によって明らかになっている」文化であると考えられています。なお、「縄文文化・続縄文文化に後続する擦文文化からアイヌ文化への移行については、その担い手に大きな変化がないとの見解から、北海道の縄文時代・旧石器時代までもアイヌ文化とすればいいと主張する方も」いますが、「各文化期の内容の差は大きく、縄文土器を使用し、竪穴住居に住むアイヌ文化といった表現は、現在の『アイヌ文化』の概念とは大きくかけ離れてしま」います(長沼孝・越田賢一郎 2011「時代の概観」『I 考古学から見た北海道』新版 北海道の歴史 上 北海道新聞社)。

※10) 諸説ありますが、松浦武四郎の記録にあるように、「サツ・ポロ・ペツ (sato-poro-pet 乾く・大きい・川) ぐらいに解するのが自然」(山田秀三 1984『北海道の地名』北海道新聞社)。

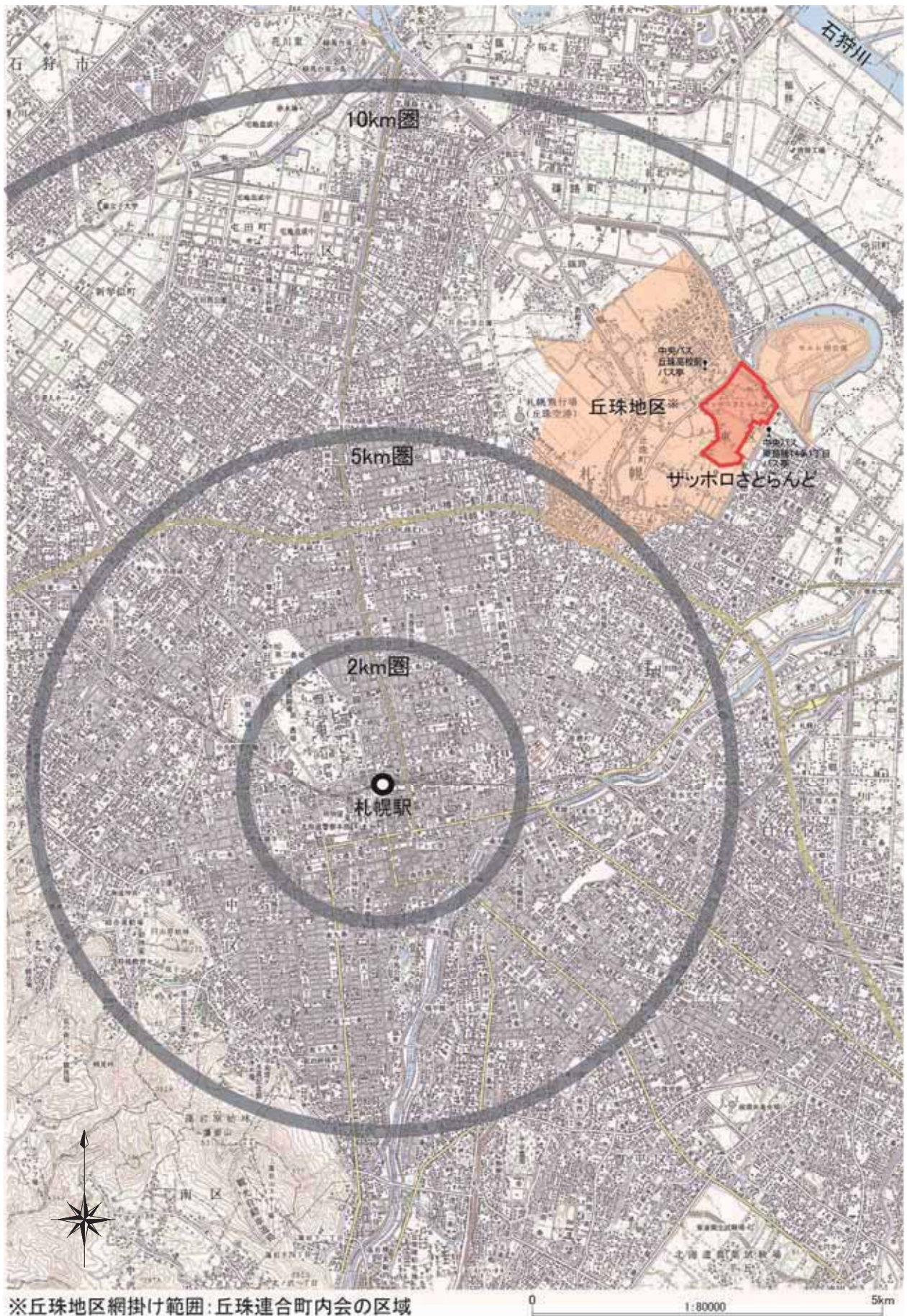
※11) 「オッカイ・タム・チャラパ。男の・刀を・落としたる所。川名。」(永田地名解)。

「この地名の前段の「オッカイタム」が和人に継承されて「丘珠」になったものらしい」(山田秀三 1965『札幌のアイヌ語地名を尋ねて』楡書房)。

※12) 「モイレ・ペツかおんというのは、川の曲がった処等で、ゆっくりと水が流れている川の事。「モイレが普通で、モエレは訛音か、或いは方言」(山田秀三 1965『札幌のアイヌ語地名を尋ねて』楡書房)。

※13) アイヌの人々は、「日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族であり、独自の言語や文化を育んできました」(札幌市 2010「第1-1 アイヌ民族の先住民族としての歴史」『札幌市アイヌ施策推進計画』)。なお、形質人類学の研究では、「日本列島に住むようになった東南アジア系集団と、主として弥生時代以後に渡来した北アジア系集団との混合によって日本人集団が形成された」とする「二重構造モデル」に基づき、アイヌの人々は「縄文人の伝統を最も濃厚に受けついで人たち」だと考えられてきました(埴原和郎編 1994『日本人の起源(増補)』朝日選書)。一方で、最新の研究では、「北海道アイヌの祖先集団とオホーツク人は、これまで想定されていた以上に、活発な文化的・遺伝的交流を行っていたのではないか」との見解が提示されています(百々幸雄、川久保善智、澤田純明、石田肇 2013「頭蓋の形態小変異からみたアイヌとその隣人たち III. 隣接集団との親疎関係」『Anthropological Science Vol. 121(1)』日本人類学会)。また、最新のDNA分析でも、北海道の「基層集団が歴史時代を通じてオホーツク文化人や本土の日本人との交流を経てアイヌ集団へと変貌していった経緯を読み取ることができる」と言われています(篠田謙一・安達登 2010「DNAが語る「日本人への旅」の複眼的視点」『科学』vol.80 No.4 岩波書店)。





第2図 丘珠地区と「サッポロさとらんど」の位置



### (3) 社会的環境

丘珠縄文遺跡が所在するサッポロさとらんどは、「人と農業・自然とのふれあい」、「都市と農業の共存」をテーマとする農業体験交流施設であり、市民が農業や自然とふれ親しみ、体験しながら憩い、楽しむことができる田園空間と本市の都市型農業を総合的に支援する拠点を一体的に創出することを目的とした施設です。

また、サッポロさとらんどの周辺には、イサム・ノグチの設計によるモエレ沼公園をはじめとして、丘珠緑地、丘珠空港緑地、札幌コミュニティドーム「つどーむ」など、文化施設や緑地が多く整備されています。

この他に、昭和 49 年に本市の無形文化財第一号に指定された丘珠獅子舞は、毎年丘珠神社の例祭で奉納されています。

#### 【札幌市農業体験交流施設サッポロさとらんど】

- ・所在地：東区丘珠町 584-2 ほか
- ・管理：指定管理者（平成 18 年度～）
- ・面積：約 102ha（施工済約 74.3ha）
- ・オープン：平成 7 年 7 月
- ・営業日：4/29～11/3（無休）、11/4～4/28（月曜日、年末年始休園）
- ・入園者数：674,780 人（平成 25 年度実績<sup>※14</sup>）
- ・主要施設：さとらんどセンター、レストハウスみのりの家、レストハウスまきばの家、風のはらっぱ、市民農園、体験農園、ふれあい牧場、さとらんどガーデン、炊事広場、さとの池、パークゴルフ場、さとらんど交流館など
- ・駐車場：7 カ所（1,800 台収容）
- ・交通：市営地下鉄南北線北 34 条駅、市営地下鉄東豊線環状通東駅、新道東駅→中央バス→丘珠高校前バス停（約 15～20 分）→徒歩（約 10 分）  
※都心（大通り）から車で約 30 分

#### 【周辺の文化施設等】

- ・モエレ沼公園：総面積 170ha の市内最大規模の総合公園  
入園者数 728,280 人（平成 25 年度実績<sup>※15</sup>）
- ・丘珠緑地：伏籠川の遊水地を活用した都市緑地
- ・丘珠空港緑地：緩衝機能、スポーツ空間機能、雨水調節機能を持つ都市緑地
- ・札幌コミュニティドーム「つどーむ」：全天候型の多目的施設
- ・丘珠獅子舞：札幌市指定無形文化財（昭和 49 年 10 月指定）

※14) 札幌市の主な観光施設利用者数の第 3 位（『平成 26 年度版 札幌の観光』平成 27 年 1 月）

※15) 札幌市の主な観光施設利用者数の第 2 位（『平成 26 年度版 札幌の観光』平成 27 年 1 月）